

# 家屋の意義

## ——ギヤロン・チベット族の房名継承と親族関係——

李 錦

(訳||高橋めぐみ)

### はじめに

ギヤロン(嘉絨)・チベット族社会は、家屋を基本単位として構成されている。家屋の名称―房名の継承は、人の経済的地位や社会的地位に深く関わる。林耀華はギヤロン・チベット族社会について次のように指摘する。「戎人は姓氏をもたないが、どの家にも必ず専用の房名がある。房名の含意は極めて広く、家屋の継承者の全ての権利と義務を代表する。家屋と財産、田畑と土地、食糧税と賦役、一族の系譜および族内成員の社会的地位など、房名に含まれないものはなく、そこには伝来の規定がある。換言すれば、房名は一族集団の物質面と非物質面双方の意味を総合



する」[林 1985: 425]。これは房名継承の重要性をよく概括している。房名の永続を保証するために、ギヤロン・チベット族には後継ぎと居所をあわせた継承の原則がある。房名の継承者は、まず、家屋と土地および一家のすべての不動産を継承し、同時に房名が包括する食糧税と賦役、およびその名声を継承する[李 2010]。房名の継承は、婚姻と居所の両面に関わる。婚姻に関しては、成人した子女は、房名を受け継ぐ子供以外は、結婚後に居住する家屋の房名を用いる、房名は夫側あるいは妻側、あるいは結婚に際して新築した家屋の房名でもよいが、両親の房名を使うことはない。居所に関しては、一つの家屋に居住する集団は、一般に、核家族か直系家族で、一組の夫婦およびその両親と子供を含み、さらに未婚の子供、あるいは同居の親

族や非親族を含むこともある。これらの人々は同一家屋に居住して同一の房名を用いる。そのためギャロン・チベット族社会では、親族と居所は同様に重要な問題である。

親族と居所という二つの原則は、東南アジアを研究する学者が家屋社会を解釈する際にとりあげる両極である。

James Foxによれば、かつて家屋社会の研究では、親族研究の概念や語彙を使う傾向があり、家屋という範疇は枝分かれした親族構造内において各等級の後継集団を画定するとしたが、後に、『発祥地』(place of origin)の概念を用いて、地点の意義を強調した。しかし、Ward Goodenoughはマレー・ポリネシア語族の社会組織について、居所は成員の身分を決定する機能をもつと指摘した。さらに、レイヴィストロースは次のように述べる。「家屋は本来様々な二項対立の原則を含み、かつその対立を超えた文化範疇であり、社会の集団生活における相対する原則——父系／母系、婚姻／居住、昇進婚／降級婚、近親婚／遠親婚、世襲／実力等を統合し、矛盾に対する超越を表出する。家屋にはこのような「相いれない二つを一つにする」機能があり、単一かつ包容性をもつ建築構造を通して、内在する二元を転化して外観的に一元化する」[列維斯特勞斯 2008: 115-134]。レイヴィストロースが提唱する「家屋社会」の概念は、本来の意味は単純交換構造と複雑交換構造の間をつなぐ仲介タイプを作ることにあった。蔣斌らの台湾パイ

ワン族研究でも、これに注目して、「家屋に関する討論は、親族研究から完全に離れることはなく、関係の客体化、商品化に近づくものである」[蔣・李 1995: 178]とする。よって、婚姻と居所は家屋研究において重視すべき問題であるといえる。

本稿では、四川省雅安市宝興県の蹠磧チベット族郷でのフィールドワークで得た資料に基づいて、ギャロン・チベット族の家屋継承の過程における、婚姻と居所の原則の具体的な機能を論じ、家屋の意義について考察する。

## 一 親族関係の様々な類型と房名継承の特徴

### (一) 一夫一妻家庭と房名継承

一夫一妻の家庭は、蹠磧の基本的家庭形態である。居住形態には、妻を娶る夫方居住と婿入りの妻方居住の二種がある。長い歴史をもつ房名は、様々な居住形態も表す。以下では、下策爾斯基家を事例として、様々な居住形態における房名継承について分析する。

#### 事例1 下策爾斯基家

楊国奇家の房名は下策爾斯基である。曾祖母は朝霞で生まれ、下策爾斯基の房名を継いだ。曾祖父は魚通嘎喇家の

三男で、婿に入った。祖父は三人兄弟で、長男はチベット名が策梭、蹺豊へ婿入りした。次男は楊国奇の祖父にあたり、チベット名は嘉木錯、家に残つて房名を継いだ。三男はチベット名が達克特児で、蹺豊へ婿入りした。父は三人兄弟で、長男はチベット名が勞絨、本来は家を継ぐはずであったが、婿入りした。次男は国奇の父の生龍で、チベット名は長寿で、家を継いだ。三男はチベット名が龍特児で、出家してラマになり、チベットの大昭寺で一〇年学び、故郷に戻つて永寿寺の住職になり、九〇余歳で亡くなった。国奇の代は一男四女で、国奇は年齢では三番目であったが、唯一の男だったので房名を継いだ。長女は国民党の彭旅団長に嫁いだが、彭旅団長が蹺磧に七カ月滞在して去つた時についていかず、後に他家に嫁いだ。次女は氷豊の阿夸爾家に、三女は蹺豊に、四女は朝霞に嫁いだ。

楊国奇は、六男一女をもつ。長男はチベット名が澤朗、すぐ上の姉に子供がいなかつたので八歳で養子となり、阿夸爾家の房名を継いだ。国奇の房名は次男が継ぎ、その娘が朝霞の達拉美諾家の息子（革細工職人）を婿に迎えて房名を継いだ。三男は結婚後分家して新しい房名「達給」（くぼみの下に土地があるの意）をつけた。三男の死後、末子の肯崩特爾が房名を継いだ。四男は蹺豊に婿に行き、二人の娘がいる。五番目は娘で雅安市蒲江県に嫁いだ。夫は漢族の職人で、蹺磧に出稼ぎに来た時に知り合つた。一

男一女がいる。国奇夫妻は娘のところによく遊びに行く。五男は分家して、房名を錢木森爾（新しい家の意）とした。六男は分家したが未婚。分家時に馬二頭、牛四頭、ヤク一〇頭、請負地四畝（一畝は約〇・〇六七ヘクタール）、山林五〜六畝（実際は一〇〇畝以上ある）をもらった。

以上の事例から、様々な居住形態が房名の継承に及ぼす影響がわかる。第一世代の曾祖父は下策爾斯基家に婿に入つて妻方に居住。家族数は不明であるが、息子はいなかった。第二世代と第三世代は、房名はすべて一族の息子が継いだ。妻方に居住した曾祖父の子女もみな下策爾斯基の房名の継承権を持っていたが、長男が優先された。

第二世代の楊生龍の房名継承には、次のような物語がある。

下策爾斯基家は、父の代は長男の勞絨が房名を継ぐことになつていた。国奇の父の生龍は次男で継承権がなく、あちこちで小作人をした。家業を継承する者は献金や納税の義務があつたが、小作人にはその義務はなかつた。国奇の父母はよく働いたので、やがて食には困らないようになった。後に長男の勞絨が婿に行つたために、祖父が国奇の父母に戻つて房名を継ぐかたずねた。もし戻らないなら土司のところへ行つて世帯を抜く。土地を渡せば納税の必要はないといつた。しかし土司から、家に本当に後継者がいないなら処理するが、後継者がいるのになぜ継がないのかと非難され

たため、国奇の両親が戻って房名を継いだ。彼らが戻りたくなかったのは、親が決めた結婚を拒否して恋愛結婚をしたので祖父はよく思っておらず、子供ができてようやく認めてもらったからだ。しかし、実家に戻ってから彼らはよく働き、有能だったので暮らし向きもだんだん良くなった。

国奇の父が戻って房名を継いだのは、長兄が自ら継承権を放棄して婿養子に行ったからである。しかし国奇の父は両親が決めた結婚を拒否して、好きになった女性と一緒になったため、家族からの援助はなく、蹺躓では地位が最も低い小作人となった。彼らに子供ができ、長男も家を離れたのでようやく両親の許しを得て実家に戻った。父の弟はラマで、長いあいだ下策爾斯基家に住み、家族から経済的援助を受けた。

下策爾斯基家は、第三代が男は国奇だけで、姉妹はみな嫁いだったので、国奇が房名を継いだ。第四代には六人の息子がいたが、次男が房名を継ぎ、一人は新たな房名をつけ、一人は養子に行き、それ以外は分家した。第五代は、一人娘だったので婿を取って房名を継いだ。現在は、国奇夫妻、次男夫婦、孫娘と婿養子、その子供二人の八人家族である。

以上のように、一夫一妻家庭では房名継承は長男が優先権を持ち、次が次男である。もし息子がいなければ、長女

が優先的に継承者となる。この原則は、居住形態が夫方でも妻方でも大きな差はない。

## (二) 一夫多妻家庭と房名継承

一九五〇年以前、蹺躓にも数は多くはないが一夫多妻家庭が存在した。その房名継承の状況は以下のようである。

### 事例2 蹺躓の策励家

策励家の楊和清には三人の妻がいた。一人目は和平出身で、房名は策励、和清は婿入りして子供一人をもうけた。和清の死後、息子が房名を継いだ。二人目は豊取出身で、房名は麼爾巴、和清が和平に婿入りしたため、同居は一時期だった。後に妻の兄弟が亡くなり、姉も失明したため、彼女が実家に帰った。和清はよく豊取で過ごし、五人の子をもうけた。長男が麼爾巴の房名を継いだ。三人目ははじめ柳落の達拉家に嫁いだが、夫の死後、和清が婿入りし、三人の子供をもうけた。前夫との間に生まれた子供が達拉の房名と財産を継承し、和清の子には継承権がなかった。

以上の事例から、一夫多妻では、男性は妻方に居住するが、その子女の継承権は房名を持つ妻次第であることがわかる。すなわち、もし妻が房名の継承者であれば、夫の息子は房名を継承できる。もし妻が房名の継承者でなく、婿出して夫方居住した場合、房名を継承する前夫との間の子供が房名を継ぎ、前夫の死後に婿入りした夫との間の息

子には繼承権がない。

### 事例3 嘎日文扎家

嘎日文扎家の趙清林は蹠磧五寨で最も勢力のある保長で、多くの財産をもっていた。二人の妻がおり、一番目は娶った。二番目は策德拉家の者で、兄弟がみな亡くなって家と田畑が残されていたので、清林が婿入りして三人の子供をもうけ、息子が策德拉家の田畑と房名を継いだ。清林の婚姻は、有力者がよく行った婚姻形態で、残された孤児や未亡人がきつい労働や賦役に応じられない時には、婿に入ってその財産を手に入れる。ただし房名繼承については、夫方居住の場合は、夫の息子が繼承する。妻方居住の場合は、妻方に繼承者がいない時は夫の息子が繼承する。

### (三) 養子縁組と房名繼承

家に子供がおらず、老人のみの場合には、親戚の子供を養子にして房名を繼承させる。

#### 事例4 水豊の阿夸爾家

阿夸爾家は、現在の戸主は漢名を楊朝華という。朝華から遡る三世代の關係は複雑である。一代目は二男一女で、長男は、チベット名は木泰、二番目は娘でチベット名は安卡、三人目は男でチベット名は阿太である。木泰は阿夸爾家の房名を継いだが、安卡が卧嘎龍家に嫁いで間もなく亡くなった。阿太が房名を継いだが、まもなく亡くなった。

阿夸爾家は繼承者がいなくなり、安カの次男の阿爾佳が阿夸爾家に戻って房名を継いだ。貝爾佳は下策爾斯基家の楊国奇の次女を娶ったが、早くに亡くなり、子供もいなかったため、残された楊国奇の次女のもとに国奇の長男澤朗（漢名楊朝華）を養子にやった。朝華は八歳で朝霞へ行き、阿夸爾家の房名を継いだ。ただし叔母のことを阿尼と呼ぶ<sup>③</sup>。朝華は二七歳で蘭卡仲と結婚したが子供ができなかったので、朝華の弟の娘、徳熱錯を養女にした。徳熱錯は叔父の朝華を阿地と呼ぶ<sup>④</sup>。

阿夸爾家では、二度養子をとったが、いずれも近い親戚である。養子縁組の過程は、漢族の父系血縁家族のそれとは全く異なる。養子は男女どちらでもよく、養子縁組したあとも旧呼称を変える必要はなく、新家庭で新たな親族關係を結ぶ必要もない。

### (四) 子孫が途絶えた後の房名繼承

蹠磧では房名の繼承が重視されており、「房名は千年続くが、人は百十年しか生きられない」という。房名は長く続くが、人は常に変わるという意味であり、後継ぎの断絶はまさに人を代える重要な原因である。

一般に、房名を繼承する長男あるいは長女が亡くなると、嫁出した者あるいは他家に婿入した者が実家に戻って房名を継ぐ。例えば、三人の娘と息子がいて、長男か長女

が家に残って房名を継ぐと、他の者はそれぞれに嫁ぐか婿入りする。しかし継承者が亡くなれば、親戚友人が相談したうえで、すでに嫁いだ者あるいは婿入りした者が戻れるなら戻って継ぐ。もしみな戻って来られない場合は、その次の世代が戻って継ぐ。それもできない場合は、兄弟の次世代を戻し、姉妹の次世代と結婚させて、房名を継がせる。誰が継ぐかは親戚たちが相談して決める。一般には適齢期の者や干支が合う者を探す。旧社会は疾病が横行し、匪賊が横行し、死亡率も高かったたので、家系の断絶が少なくなかった。骨が違いさえすれば（兄弟間の子女でなければ）、近い親戚でも結婚できるので、戻して財産を継がせた。

#### 事例5 嘎日の文吉格爾達家

文吉格爾達家には兄弟姉妹が四人いる。二番目が息子だったので家に残って家産を継いだが、インフルエンザで一家全員が亡くなった。親戚たちは誰が戻って継ぐか協議した。長女は結婚後、暮らし向きは悪くないので戻る必要はない。三番目は息子で、チベット名は肯蚌特爾、婿入りして息子がいるが暮らし向きはよくない。四番目は娘で、チベット名は張滿、嫁ぎ先での暮らしはよいので戻らない。五番目も娘で、チベット名は克司滿、娘が一人おり、家計は苦しい。婿に行った肯蚌特爾の息子が戻って継ぐのが当然であるが、克司滿の娘にも家産を継がせることができれば彼女の苦しい状況を改善できる。そこで協議の結

果、肯蚌特爾の息子に房名を継がせ、克司滿の娘を肯蚌特爾に嫁がせることにした。

以上の事例から、誰を戻して継がせるかの協議では、二世代のなかから、男女を同等の継承権をもつ者とみなし、次の三つの点を考慮して継承者を選択する。一に、禁婚の原則。「骨」が同じ者、すなわち兄弟間の子女は三世代内まで結婚できない。しかし一方の骨が違う場合、すなわち兄弟の子と姉妹の子は結婚できる。二に、家庭の経済状況。暮らし向きがよい場合は戻さない。継承によって両家の経済状況が改善できるかという点が大事である。三に、システム継承者双方の年齢と干支が合うかである。

#### (五) 養育している甥や姪の継承権

蹺躑の女性は、次の二つの状況において息子あるいは娘を実家に残す。一は、婚前にできた子で、多くは非嫡出子である。二は、再婚時に、前夫の子を実家に残す。これらの子供たちは、房名を継承する息子あるいは娘に育てられるが、房名の継承権はなく、成人後は自力で家屋を建てて分家し、独立しなければならない。

#### 事例6 貢東巴家

貢東巴家は、戸主は楊志明で、チベット名は肯崩。母は貝爾洛家の長女で、朝霞の男性と婚約して楊志明を生んだ。しかし、二人は性格不一致のために結婚はせず、母は



後に朝霞の他家に嫁ぎ、志明を実家の貝爾洛家に残した。

志明は貝爾洛家を継いだ母の兄弟に育てられたが、叔父は彼が成人すると、貝爾洛家から出して、自力で貢東巴に家屋を建てさせ、貢東巴という地名を房名にした。このほか、叩爾達家の末妹が実家に残した娘も家産を継承できなかった（事例2）。

## （六）再婚と房名継承

蹺躑では、初婚で生まれた子は、房名の優先的な継承権を持つ。再婚後に生まれた子には継承権がない。

### 事例7 策梭木雅家

策梭木雅家は、陳銀良の父の代では、父は一人っ子だった。結婚後、妻との間に一女二男をもうけた。一九四八年に妻が亡くなり、翌年再婚した。再婚相手は小金出身で、姉妹で蹺躑に逃れてきて和平に嫁ぎ、一人の娘を生んだが、のちに夫は亡くなった。再婚後、妻は前夫の二人の娘を連れて夫と同居し、息子を一人生んだ。長女は朝霞へ嫁ぎ、策梭木雅家の房名は二番目の息子が継承した。三番目の息子は卧嘎龍家へ婿入りし、末子は分家して房名を策涅阿美杜とした。

以上の事例によれば、房名を継いだ男子が再婚しても、房名の継承権は初婚時の息子にあり、再婚で生まれた子供に継承権はない。

### 事例8 達給家

達給家は、戸主は下策爾斯基家の三番目の息子で、漢名は楊朝軍。結婚後分家し、石積みのお土手の下に新居を建て、房名を達給（土手の下の土地の意）とした。朝軍は二女一男をもうけ、末子肯崩特爾が房名を継いだ。肯崩特爾は妻を娶って一人の子をもうけたが、四一歳で病死。妻は叩棘の漢族を婿に迎え、息子が一人生まれた（六八歳）。達給家の房名の継承について聞くと、みな、この漢族の夫は実家に家屋と土地があるので、将来必ず子供を連れて戻らるうといった。これは、房名は肯崩特爾の息子が継ぎ、再婚後の子には継承権がないことを示す。この事例は、房名の継承者が男性で実子がいれば、彼の死後、妻の再婚後の子には房名の継承権がないことを意味する。

以上の事例は、ギャロン・チベット族の家屋と房名の継承では、両者を同時に行い、一人にのみ継承されるという原則に基づくこと、継承者は男女双系であり、継承の順序は婚姻と住居の二つの原則によって決められることを示している。レヴィーストローヌは、ヨーロッパとインディアンの家屋社会について次のように述べる。「我々が直面するのは同タイプの制度である。ひとりの法人は、物質的および非物質的な財産からなる家産を保有し、家系と房名によって富と称号が継承されていく。家系は真実であろうと虚構であろうと、その連続性が親族あるいは婚族関係の名

で表出されている限り正当とみなされており、往々にして  
「真実と虚構の両面を持ち合わせている」。このような家屋  
社会の特徴は、房名継承において鮮明に表出されている。

## 二 房名の継承と親族関係の確定

一九四三年、林耀華は現在の馬爾康県梭磨土司官寨東の  
卡色爾登寨で調査し、次のように指摘した。毛埃（房名）  
家には「二人の兄弟がおり、長男の名は班馬、次男の名は  
王爾甲である。班馬は妻を娶って息子と娘が生まれ、毛埃  
の家屋を継承した。弟の王爾甲は隣村に婿入りし、毛埃家  
の一切の権利を得ることはできなかった。ただし兄弟は仲  
が良く、日頃の付き合ひも密で、農作業も互いに協力し  
た。毛埃の家屋は父から子へと一人によつて継承され、兄  
弟二人で継ぐことはできない。一族という立場からいえ  
ば、班馬と王爾甲は同じ一族の成員ではなく、家屋も房名  
も異なる。しかし、親族という立場でいえば、兄弟二人は  
血縁の親族であり、互いに密接な関係にある」。続いて、  
安培家について次のように指摘した。安培家の戸主である  
阿斯塔には娘が二人おり、長女は実家に残つて婿を迎え、  
次女は本寨の柯謝家に嫁いだ。「二人の娘はともに父親と  
血縁関係があり、呼称も変わらない。しかし房名が異なる  
ために、結婚の方式や親族間の責任と義務が異なる。房名

の継承が親族関係に如何に大きな影響を及ぼしているかが  
わかる」〔林耀華 1985: 427〕。またそれは親族ネットワー  
クでの地位を変化させるだけでなく、互助関係の変化も  
決定する。

家屋の建築には多くの人的資源と物的資源が必要であ  
る。そのため、蹺躓では互いのネットワークの維持に非常  
に気を配る。家屋の建築は、社会における交流のプロセス  
を表し、その中で、異なる関係の人たちが様々な役割を発  
揮する。蹺躓は二〇〇八年五月二二日の汶川地震で被災  
し、二〇〇九年は災害復興における再建ラッシュが続いて  
二月から続々と着工し、九月末にほぼ完工した。我々は家  
屋再建における相互援助の取り組みをたくさん目にした。  
以下で、阿夸爾家の家屋再建の過程を事例として分析す  
る。

### 事例 9 阿夸爾家の家屋建設における

#### 相互扶助ネットワーク

阿夸爾家がかつて金川の頭人であった。金川事変で乾隆  
帝の攻撃を一三年間うけて敗れた後、穆坪土司のもとに逃  
れて、定住した。現在の戸主は、漢名が楊朝華、チベット  
名は澤朗である。安漢の時（一九二九年）、道尹黃煦昌が  
部隊を率いて蹺躓に攻め入り、阿夸爾家の家屋を焼き払っ  
た。一人身だった叔母は、楊朝華を引き取つて房名を継が  
せ、苦勞して家屋を再建したが、数十年間で建てること



できたのは現地で「又叉房」と呼ばれる粗末な家屋で、塀は人の背丈ほどで木の棒を支柱とし、杉板で屋根を覆うだけだった。改革開放後、経済状況が好転し、一九八二年にやっと旧屋を建て直した。新居の敷地は三・六丈（約一二メートル）四方で、家畜小屋のほか、二階建ての母屋には鍋庄舞の部屋、東向きに経堂、台所と七つの部屋がある。朝華は自分のかつての家について誇らし気に語る。石工を六カ月雇ってたくさんの風化石を使い、すべての隙間が石で埋められていたと。しかし、彼は後に瓦工場で瓦を焼いて十数年働いたために体の調子を崩した。請負地八・七畝を耕し、家畜は牛四頭と羊数頭だけでヤクはなく、森林地域を一〇〇畝余り保有するだけである。経済状況はよくない。

二〇〇八年五月一二日の汶川地震後、楊朝華家は壁の亀裂がひどく、一部が損壊して倒壊の危険がある建物とされた。八月に国家災害後復興補助資金を得て、新居の建築を始めた。新居は鍋庄舞の部屋が二・七丈（約九メートル）四方で、二階は経堂が五部屋続き、床面積は約二〇〇平方メートル。補助金は災害後住宅再建援助一万六千元（家族数三人以下）と仮住まい補助二千元、中華全国工商業連合会補助二千元で、このほか国家補助として一八トンのセメントと二本の円柱用梁の鉄筋費があり、個人がまず立て替え、完成後に清算する。経費はすでに八万円を超え、完成

時の総支出は一〇万元に達する予定である。

建築の過程では、親戚や隣人がレンガを背負い、泥を運び、木を伐採して助ける。通常では、新居は総面積が二〇〇平方メートルあり、石を背負う作業だけでも延べ八〇〇人要る。楊家の家族はわずか三人で、朝華自身は腎臓病、妻の蘭卡仲も婦人病でいづれも力仕事はできず、養子の姪もまだ二〇歳で大した労働はできない。このような家庭では自分たちだけで家を建てるのは不可能であり、二〇〇八年八月に家までの道路が補修され、二〇〇九年一〇月までに基本的に家屋が完成したのは親戚や隣人が常に手伝いに来てくれたおかげである。楊朝華の話によれば、最も重要な助けは現金支出が必要な項目であり、主に親族によるという。

楊朝華は朝霞の下策爾斯基家から阿夸爾家に来て房名を継いだ。下策爾斯基家にとって彼はすでに一族の者ではなく、そこから手伝いに来る親戚はいない。また阿夸爾家も家族が増えなかつたために手伝いに来る者がいなかった。しかし、妻蘭卡仲は水豊で最多の人口をもつ森堤家の唯一の娘であつたため、金銭面での助けはみな蘭卡仲の兄弟による。うち、楊朝軍は蘭卡仲の二番目の叔父の息子で、自身も長期間外地で工事を請け負っていたため掘削機や車をもち、経済状況も良かった。楊朝軍の父は蘭卡仲の父の弟で、母は蘭卡仲の母の妹である。両親双方が実の兄弟姉妹

の関係であったため、楊朝軍は蘭卡仲を全力で助けられた。

楊朝兵は森堤家を継いだ息子で、両親と一緒に暮らす。彼が立て替えた資金をみると、一部は回収不可能である。妻の南卡曼にこのことを尋ねると、朝兵は実家を継いだのだから当然のことだという。蘭卡仲は嫁いだ時に両親から財産をもらっていないなかったので、彼女に助けが必要な時は、実家を継いだ者が父母の責任を引き継ぎ、助けるのだという。

楊朝学は森堤家の六番目の息子で、分家して一人暮らしであるが、家庭条件は普通なので、姉の家に資金を出すことはできない。しかし、彼は優れた職人で石工と大工のどちらもできるので、相場より二〇元低い日当で毎日姉を手伝っている。この助けは一見大したことないようにみえるが、二〇〇八年八月から二〇〇九年一〇月までに、嘎日村では一五〇戸が新築し、職人の賃金は値上がりし、基本的に職人に空き時間はない。このような状況下で彼は一年で六〇日間余り手助けを続けており、簡単なことではない。王学華と郭光全は遠い親戚だが、楊朝華は二人を甥姪とする。実際、どちらも阿夸爾家の親戚だが、親戚関係は三代を経てすでに遠い。そこで二人は相場より一〇元低い日当で石工や大工の仕事をしたが、これも親戚だからそうしたといえる。

森堤家であっても、蘭卡仲に現金の援助をしない兄弟もいる。長兄は八日馬美地家に婿入りしたが、二人目の夫であったため房名を継承する権利はなく、自分の家屋も被災したため、妹を助ける義務も能力もなかった。三番目の兄の楊朝清は亡くなっている。四番目の兄の楊朝雲はダム建設のために引越して家を建てたばかりで、まだ多くの借金が残っており、姉を助ける能力がなかった。五番目の楊朝康は息子が大学に進学し、一〇月には娘も嫁ぎ、家庭経済の状況がよくない。七番目の楊朝良も家が地震で損壊し、新築中である。

以上のことから、家を再建する過程では、夫と妻の双方の一族に援助する義務があるが、能力の大小や親戚関係の遠近によって各人の意志のもとに行われ、援助の方法や程度は強要されるものではない。親戚間の相互援助の義務は重要だが、強制的ではないことがわかる。

親戚以外では、隣人が助ける。実は、氷豊では、房名間の婚姻関係が密接であるため、村民は遠近の違いはあるもののほとんどが親戚関係にあり、隣人と親戚との違いはつきにくい。しかし、楊朝華の分類では、二種類の人だけが親戚である。一は、阿夸爾家の親戚で、三世代を経た親戚も含む。二は、森筒井家の親戚で、妻の実家の兄弟と叔父の兄弟である。それ以外を隣人と呼ぶ。例えば、雍仲錯は、楊朝軍の実の妹で、実家も森堤家だが、彼女はすでに

卧喰龍家に嫁いだので呼称上は蘭卡仲姉さんと呼ぶが、家の建築時に現金を援助する義務はない。

隣人の助けは、いつ、何度行くかは手伝う者の意志で決める。しかし、通常では、家屋の建築には石を運んだり、泥を運んだりする仕事に人手がいることを知ったら、隣人は必ず行く。雍仲錯の言葉で言えば、もし人を助けなかつたら、将来自分に何かあった時に誰も助けてくれない。だから、時間があれば手伝いに行く、と。そのため、円柱の梁を立てるような、その日のうちに必ず終えなければならぬ作業の時には、事前に日を決め、電話で隣人や親戚に手伝いを頼む。そのほか、石を背負ったり、泥を運んだりするのは隣人や親戚が自発的に手伝いに来てくれる。主人側は三度の食事を用意するだけで、謝礼を渡す必要もない。隣人間の相互扶助が、注意深く維持されていることがわかる。

## まとめ

第一に、蹠蹟における房名継承の特徴は、後継ぎと居所の二つの要素は同時に発揮される機能として、親族と婚族と双方に用いられ、社会的な継承が保証されていることである。これはレヴィ・ストロースの次の見解をさらに進めたものである。「後継ぎと居所との弁証的關係は家屋社会

(house society) の基本的特徴であり、共通の特徴を形成する」[列維・斯特勞斯 2008: 129]。

第二に、房名の継承によって形成された親族関係において、房名を中心とした家族の観念は血縁観念よりも重要であり、まさに阿齊茲がチベットの定日の血縁と居住形態を論じたなかでも触れたように、「すべての社会関係を関係づけているのは血縁観念ではなく、家族の観念であり、中心にあるのは居住の原則である」[巴伯若・尼姆里・阿吉茲 2001: 412]。蹠蹟における房名継承が親族関係に影響を与えていることが明らかになった。

第三に、林耀華がギャロン・チベット族の家庭と結婚を研究した後に、ギャロン・チベット族は「房名の継承と一族の継承は互いに連携しており、実はこの二つは一つである。継承法は双系制で、男女どちらも代々受け継ぐことができるが、どの世代も一人しか継承できない」とした。ギャロン・チベット族の房名継承の特徴をかなり正確に描写しているが、ギャロン・チベット族社会の血縁関係を家族の継承だとすることは、なお検討を要する。

〔付記〕本稿は国家社会科学基金重大招標項目「二〇世紀二〇一四〇年代人類学華西学派的学术体系研究」(批准番号: 17ZDA162) の成果である。

## 注

- 〈1〉 翻訳書ではhouseを“家宅”と訳すが、本稿では人類学の“家屋”を適当として用いた。
- 〈2〉 本稿の事例は二〇〇九年から二〇一三年にかけてのフィールドワークによる。一夫多妻の事例は、Y G Q老人から提供された以外は話し手本人の事例である。
- 〈3〉 音訳。蹺躑の親族呼称では、上の世代の父系の女性親族で母親以外の者を指す。
- 〈4〉 音訳。蹺躑の親族呼称では、上の世代の父系の男性親族で父親以外の者を指す。

## 参考文献

- 巴伯若・尼姆里・阿吉茲 2001 『藏辺人家——關於三代定日人的真實記述』 翟勝德訳、西藏・西藏人民出版社
- 列維・斯特勞斯 2008 『面具之道』 張祖建訳、北京・中国人民大学出版社 (Claude Lévi-Strauss, *La voie des masques*)
- 李錦 2010 「家屋與嘉絨藏族社会結構」 広州・中山大学博士論文
- 林耀華 1985 「川康嘉絨的家族與結婚」 林耀華著『民族学研究』北京・中国社会科学出版社
- 蔣斌・李静怡 1995 「北部排湾族家屋的空間結構與意義」 黄応貴主編『空間、力與社会』台湾・中央研究院民族学研究所